

北海道価値創造パートナーシップ会議 in 苫小牧
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時 平成 27 年 4 月 24 日（金）14：00～16：00

場所 苫小牧市文化交流センター 2 階 講習室

I 議 事

1. 開会
2. 出席者紹介
3. 国土交通省北海道局説明
・新たな北海道総合開発計画に向けて
4. 出席者による意見発表
【テーマ『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備、対流促進』（サブテーマ）雇用の維持・創出】
① ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介
② 日頃の活動を踏まえてご意見
5. 意見交換
6. 閉会

II 出席者（順不同・敬称略）

澤田 和宏	国土交通省 北海道局長
桜田 昌之	国土交通省 北海道局 参事官
今 日出人	国土交通省 北海道開発局 開発監理部 次長
原 俊哉	国土交通省 北海道開発局 室蘭開発建設部長
小林 力	国土交通省 北海道開発局 開発監理部 開発計画課長

石井 宏和	neeth 株式会社 代表取締役 CEO
井田 英美子	株式会社いただきますカンパニー 代表取締役
浦田 隆	株式会社山口油屋福太郎 取締役常務 福太郎株式会社 小清水北陽工場長
近藤 和彦	トヨタ自動車北海道株式会社 取締役副社長
須賀 紀子	登別温泉郷滝乃家 取締役女将 北海道女将の会 会長
布村 重樹	函館がごめ連合 代表
星川 光子	NPO 法人いぶりたすけ愛 理事長

Ⅲ 議事

1. 開会

小林：

ただ今から「北海道価値創造パートナーシップ会議 in 苫小牧～新たな北海道総合開発計画に向けて～」を始めさせていただきます。本日はお忙しい中、またお足元の悪い中お集まりいただきましてありがとうございます。会議の進行を担当いたします、開発局の小林と申します。宜しく願いいたします。この会議につきましては北海道内各地域の課題解決や活性化に日頃からご活躍されている方々のご意見等をお伺いし、新たな北海道総合開発計画に生かすとともに、関係者相互の協力関係の促進を図ることを目的として開催させていただきます。本日の会議はマスコミの方も含めまして一般の方々に傍聴いただいております。また本日の配布資料でございますが、1 から 6 ということで用意させていただいております。不足等ありましたら事務局に言っていただければと思います。本日の議事録及び資料につきましては後日、国土交通省のホームページに掲載させていただきますのでご承知おきください。では始めに国土交通省を代表しまして澤田北海道局長からご挨拶を申し上げます。

澤田局長：

国土交通省北海道局長の澤田でございます。皆様には年度当初の大変お忙しい中、本日当会議にご出席を賜りまして、本当にありがとうございます。また平素より私ども国土交通行政の推進に格段のご理解とご協力賜っておりますこと、この場をお借りしまして改めて感謝申し上げます。

現在政府では地方創生というのが最重要課題ということになっておりまして、その一連でいろいろな動きがございます。特に国土交通省では国土のグラウンドデザイン 2050 というものを昨年の 7 月に策定いたしました。これは 2050 年にはこうあるべきだ、こうあって欲しいという、そういったイメージを整理したものでございます。それを受けまして国土形成計画というものの改定に着手しております。まち・ひと・しごと創生本部というのが政府にできまして、いろいろな政策を現在進行形で検討がなされている状況であります。北海道はということでございますが、北海道開発のビジョンを示します、北海道総合開発計画、現在は平成 20 年に閣議決定された、第 7 期の計画が進行中でございます。北海道が一生懸命頑張っている中で、例えば観光を見ますと、訪日する外国人旅行客の方が順調に増えてきているわけですが、一昨年 1000 万を超えて、昨年は 1341 万で北海道はその中の 1 割くらいのシェアを占めております。日本としては 2020 年に 2000 万人を目指そうという目標がありますが、その中でも北海道はこれに大きく寄与してくれ、貢献してくれという、非常に強い期待がございます。今非常に大きな動き、環境の変化がある中で、北海道の最もベーシッ

クな農林水産業、これにつきましては今までも力を入れてきましたが、環境が激変する中でさらにきちんと振興が図られるようにしないといけないという状況になっております。今申し上げた環境の変化、展開を踏まえまして、私共は今年の1月30日に国土審議会の中に北海道開発分科会があり、そちらに国土交通大臣から次の北海道総合開発計画の検討に向けてということで諮問をさせていただいて、次の計画づくりのキックオフがなされたという状況であります。現在は北海道開発分科会の下に北海道経済連合会の大内会長に部会長をお願いいたしまして、計画部会という、実質的にその場で審議をいただくわけですが、その部会で精力的に審議をいただいているという状況でございます。先ほど2050という中長期的な数字と、この計画というのは計画期間10年でありますので、10年後ということになるのですが、来るべき10年というのは、急激な人口減少、少子化、今まで経験したことのない異次元の高齢化という激変する環境の中で、地域の生き残りをかけた10年間になるだろうと思っております。一方で北海道新幹線の開業があるなど、次の飛躍への契機になる10年になるという、2つの側面を持った10年間になるだろうと思っております。2050年を見据えて北海道が世界水準の価値を創造する場になるように、我々の次の計画の柱にもなるのですが、人にも光を当てながら、人が輝く地域社会を前提として、道内各地域の対流はもちろんのこと、道内道外の対流を強く意識しながら、一方では世界で目を向けて仕事を作って、外貨も含めて稼ぐ力になる産業を振興していくということにも重点を置いていきたいと考えております。この計画の策定にあたりましては、地域の皆さんのいろいろな声を聞かせてもらおうと、積極的に意見を伺いに回ろうと心がけておりまして、この北海道価値創造パートナーシップ会議、さる3月8日に札幌で1回目を開催させていただきました。今日の苫小牧が2回目ということになります。来月は岩見沢市、網走市、稚内市でそれぞれ開催をさせていただこうと考えております。本日は日頃いろいろな地域の課題解決や地域活性化に携わっておられる皆様から経験に裏打ちされたご意見を聞かせていただけるということで、個人的にも楽しみにして出席させていただきましたが、本日お聞かせいただくご意見は、次の計画の整理をさせていただく中で大いに活用させていただこうと考えておりますので忌憚のないご意見を聞かせていただくことをお願い申し上げまして、簡単ですが冒頭のあいさつとさせていただきます。

2. 出席者紹介

小林：

報道関係者の方々をはじめ、カメラの撮影はここまでとさせていただきます。続きまして出席者のご紹介をさせていただきます。石井様でございます。

石井：

宜しくお願いいたします。

小林：

井田様でございます。

井田：

宜しくお願いいたします。

小林：

浦田様でございます。

浦田：

宜しくお願いいたします。

小林：

近藤様でございます。

近藤：

宜しくお願いいたします。

小林：

須賀様でございます。

須賀：

宜しくお願いいたします。

小林：

布村様でございます。

布村：

宜しくお願いいたします。

小林：

星川様でございます。

星川：

宜しくお願いいたします。

小林：

続きまして国土交通省の出席者でございます。澤田北海道局長でございます。

澤田：

改めまして宜しくお願いいたします。

小林：

桜田北海道局参事官でございます。

桜田：

宜しくお願いいたします。

小林：

今北海道開発局開発監理部次長でございます。

今：

宜しくお願いいたします。

小林：

原北海道開発局室蘭開発建設部長でございます。

原：

宜しくお願いいたします。

3. 国土交通省北海道局説明 新たな北海道総合開発計画に向けて

小林：

それでは北海道局より「新たな北海道総合開発計画に向けて」について説明いたします。

桜田参事官：

お手元に資料 2 と書かれたペーパーを基にして開発計画策定のバックグラウンドをご説明申し上げます。1 ページは次の開発計画の策定に向けての主な視点・論点ということで、先ほど澤田から話がありました通り、計画検討の背景といたしまして、時代の潮流の変化が

ございます。人口問題やグローバル化、国際環境の変化、大規模災害の切迫という大きな変化がここに来て生じてきております。特に人口につきましては2、3ページ目でご説明いたしますと、グラフが山のようになっていますが、赤の線が北海道の人口の状況でございます。平成9年をピークに右肩下がりの状況でございます。全国の数字は青のグラフになっております。平成20年をピークに右肩下がりの局面になってきております。お分かりのように北海道は全国より10年早く人口の減少が進んでいるということでございます。右肩上がりのグラフは高齢化率を表しております。赤が北海道で青が全国ですが、これを見ましても北海道の高齢化は全国を上回るスピードで進展していくと予測されております。北海道の強みであります、農林水産業、観光といった地域を支える基盤もこのまま人口減少が進んでいきますと危うい状態になるということがございまして、地域としての生き残りという問題意識が出てまいりました。2040年には北海道の人口は420万人を切るという予測がなされております。次ページをご覧ください。人口減少は出生率と社会動態の2つに分けられます。出生率の低下に歯止めをかけるというさまざまな議論がなされておりますが、出生率が上昇に転じて人口が増えていくには20年30年あるいはもっと先ということになりますので、次期開発計画については特に社会動態の方、人口の流出を食い止めていく方向で考えていくのが良いのではないかと問題意識でございます。真ん中に北海道の地図がありますが、2013年の社会動態でございますが、道内から道外へ8000名を超える人口が流出し、札幌市を除く道内から道外へは5000名を超える人口が流出しております。北海道内においては札幌を除く道内から札幌市への流出が12000名を超えて発生しております。その内訳といたしまして、左下のグラフで年齢別にどうなっているかですが、道外転出の状況でございます。青の男性、赤の女性とも20～24歳くらいをピークに大きな流出になっております。右下のグラフは札幌市を除く北海道内の流出の状況でございますが、こちらも男女とも20～24歳くらいにピークがございまして大きな流出が起きております。従いまして若年層の雇用が非常に大きな問題だと認識しております。同じグラフで、60歳～64歳のところに小さな山ですが流入が見られます。これは若いころに本州に流出した人がリタイアされて北海道に戻ってくるという山なのかなと考えております。このヤングシニアの受け入れも大きな視点になるのではないかなと考えております。そういったことを背景に2050年を見据えまして世界水準の価値創造空間を形成するビジョンのもとに背景のフレームワークを1ページの(3)で掲げてあります。人材の確保、対流の促進、人が輝く地域社会、世界に目を向けた産業といった視点で次の計画の切り口を展開していこうと考えてございまして、本日お集まりの皆様の忌憚のないご意見をお願い申し上げる次第でございます。

4. 出席者による意見発表【テーマ『人が輝く地域社会～「世界水準の価値創造空間」の形成に向けて環境整備、対流促進』（サブテーマ）雇用の維持・創出】

① ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介

小林：

ご出席の皆様からの意見発表にうつります。次第をご覧くださいてわかるようにサブテーマが雇用の創出ということで、ふさわしい方々をお呼びしております。テーマは 2 つのセッションに分かれております。まず、ご自身が実践されている分野での活動や取組のご紹介、次に日頃の活動を踏まえてご意見ということで分けさせていただいております。まずご自身の活動や取組についておひとり 3 分程度でお願いいたします。まず石井様からお願いいたします。

石井：

neeth の石井と申します。neeth の石井として参加しておりますが、立場が二つありまして、お手元に資料が 2 つあると思います。1 つは農山村に仕事を作るということをミッションに掲げ、若者が農山村に定着できるようにですとか、最近だとスーパーフードと呼ばれていますが、北海道でできた農産物に東京農大で研究しているバイオ技術を生かした農作物の付加価値化をして、そうした食の生産流通事業をオホーツク、札幌、伊達を中心に活動をしている会社が neeth でございます。neeth としては若者に食育ですとか、農業のことをちゃんと知っていただくということで、まずは交流から始めようということで農山村に農業体験に行くという活動をしております。この活動は 2011 年には農林水産大臣賞を受賞することができ、年間 100 人近くの若者が農山村にショートステイをして農山村の暮らしを体験したりですとか、そこから農業に目覚めて地域に定住をして農業を始めた若者もいます。そうしたものが生まれている neeth という会社の活動をしています。

もう一つは札幌ビズカフェという IT 企業や IT ベンチャーの支援をする NPO で 15 年活動しておりまして昨年から代表理事になりました。15 年前の学生時代に起業家たちの生き方に触れて企業家精神に啓発されて未熟ではありますが 9 年前に会社を作ることができ、女性や若者が地域で起業するお手伝いをする、ビズカフェという活動もしております。時間もありますので概要だけにさせていただきます。

井田：

帯広から参りました、いただきますカンパニーの井田と申します。今、石井さんから若者を対象にした農業体験というお話がありましたが、私は 1 年生と 3 年生の娘がおりまして一人で子供を育てながらしているのですけれども、母親の視点での農業提供活動を観光プログラムとして実施をしている事業になっております。まだ始めたばかりでして今年 4 年目を迎えます。どんな活動かと言いますと、私の住む帯広市は食料自給率 1100%というこ

とで北海道の中でも非常に農業に力のある地域で、専業農家さんがほとんどです。他の地域ですと農家の方が副収入的に観光事業を起こされるということが多いのかなと思うんですけども、専業で成立している農家さんが多いという中で、夏季のみの観光事業に乗り出そうという方が非常に少ないんですね。唯一あった観光農場も閉鎖してしまったということで地元の方向けの果樹園程度しかないという状況です。そこで農家の方には農業生産をしていただいて、地域の方々がガイドとなって農村風景を案内するというような仕組みで始めました。これが非常に新しいということで今までは農家の方々にある意味丸投げをしていたという形であったのですがそれを連携しようではないかということで実施しております。会社の体制ですが私を含め 30 代女性 3 名で事務局を持っておりまして、契約ガイドは 60 代以上の定年退職された方々が約 10 名ご活躍いただいております。元小学校教員ですとか元農協職員ですとか、新聞記者さんですとか、皆さんだいたい家族に農家の方がいらっしゃり、体験を持った案内をしていただけるということで、女性が高齢者を活用しながら事業を行うという、まさに新しいビジネスかなと思っております。資料を見ていただきますとまだまだ恥ずかしい状況ではあるんですけども、初年度始めたときは本当に微々たる参加者だったのが、昨年は 1000 名を超えてきました。今後も増えていくなと感じております。今まで無料であった農村風景がこういうふう to 価値になっていくんだということを実感を通して感じているところです。次のページを見ますと、お客様の 9 割が道外からのお客様です。今後もこの傾向で進んでいくんじゃないかなと思いますし、海外のお客様についても昨年は 10 か国の視察が来られました。畑ガイドは高齢者の活用ということで、こちらは帯広市の協力を受けまして畑ガイドを養成しております。情報発信については多くのメディアで取り上げてもらえるということにつきましては、農業と観光、また女性の活躍ということで注目してもらっているなと感じております。

浦田：

福太郎の浦田と申します。わたくしの会社は福岡にあります。昭和 50 年から明太子の福太郎として明太子の製造販売を続けておりましたが、北海道のたらこの取れ高の減少により、ピークを過ぎ、取れなくなってきました。我が社の自慢は天皇陛下様、皇太子様も召し上がっていて、お土産としても買っていただいていることが自慢なんですけれども、衰退によりめんたい業界自体がダメになってしまいました。次に何かをしないといけないということで博多からラーメンやもつ鍋をやろうということがいろいろありました。しかしめんたいというのは日持ちがしない、持ち歩きが不便、小さいのに高い。こういったことを解決するために何かないかと我が社が考えた末に、明太子が入ったせんべいを売り出しました。なかなか最初はうまくいかなかったんですけども、軌道に乗ってまいりましたところ、がっちりマンデーという番組に出ささせていただき、そこから毎年 150% くらい急成長しましてここ 5 年で 3 億 5000 万の売り上げが 30 億までになる勢いになりました。しかしジャガイモでんぷんが災害やいろいろな事情でうまく取れなくなってきました。そこで 22 年に社長

に頼んで辿り着いたのが北海道の小清水町でした。「ぜひ来てください、来ていただけたら優先的にでんぷんを差し上げます」ということで参りました。我が社はでんぷんが欲しいだけで来たつもりなんですけれども、地域活性になっていました。5つある廃校のうち2つを買いました。それから網走、知床にメイン道路ですのお菓子の工場を建てたらいいんじゃないかということで工場計画もしました。そして地域の人を優先的に雇用しました。今42名の社員がいるんですけれども、2名だけは福岡から来ましたが、26名が小清水町、後が網走、斜里、清里で10名ちょっとという、地域ぐるみで人の雇用をしております。またこちらに来て、明太子のせんべいは受け入れてもらえないだろうということで地元の産品を使ったものがないよねということで、でんぷんは当然のことなんですけども、オホーツクのホタテを使い、函館、羅臼のイカを使い、北見のタマネギを使い、地元の産品を使い地元を受け入れられるように頑張っています。今進行中なのはこういったところです。

近藤：

トヨタ自動車北海道の近藤と申します。当社は1992年に苫小牧に来て操業を開始しております。トヨタ自動車というと車を作っているというイメージですが、実は部品でして、オートマチックトランスミッションというエンジンの次についている変速装置を作っております。アルミの鋳造から加工、組付まで一貫の工程を持っております。年間200万台分くらい生産をしております。従業員は3000人強おましてほとんどの方が北海道、しかもこの苫小牧近辺の方であります。一番今我々がやっているのが、雇用の維持であります。常に国際競争力を意識してやらないと、海外拠点や海外メーカーとの競争なので、どうやって維持、向上させるかが重要な課題になっております。生産技術の開発とか、ものづくりは人なので、人の採用から教育、訓練して、日本人の勤労観、責任感等のコストに表れないところを如何に伸ばしていただくかという両面で仕事をしているところでございます。

須賀：

今日は2つの顔で出席させていただいております。一つは登別温泉で旅館を2件営んでおります、女将の須賀でございます。もう一つは全道の女将が参加しております、北海道女将の会の会長を努めさせていただいております。先ほども局長さんからのお話にありましたが、予想以上にインバウンドのお客様がお越し頂いております。現在も進行形ですし、数字はうなぎのぼりになっております。当館の話を少しさせていただきたいと思っております。1軒は玉乃湯という24部屋のかなりリーズナブルな価格の宿でございます。もう一軒は登別温泉郷滝乃家で大正6年から開業しておりましたが、7年前に全面取り壊しまして新しく建て直しました。以前は61部屋ありましたが、30部屋という小規模に致しました。その一つの原因として、日本は少子化の傾向があり、働き手不足になるだろうということでした。現在もう既に人手不足で苦勞しております。登別温泉は14件の宿泊施設が隣接しております。大半が大規模旅館でございまして、近年はインバウンドでかなりにぎわっており、登別温泉

街も人通りが多く活気づいております。高橋知事が申しておりますけれども、2020年には300万人、日本のインバウンドの1割強の受け入れの夢を持ちながら北海道は邁進していかないといけないのかなと思っております。私は現場にありましてそこでいろいろなことが起きております。後程ぜひお話をさせていただきたいと思います。

北海道女将の会は、北海道全地域をほぼ網羅しておりまして今は33名の女将さんが参加しております。1999年に立ち上げました時60数名おりましたが約半数に減少致しました。退会の理由は、旅館業の廃業がかなりいらっしゃいます。活動内容ですが、1年に2回ほど女将さんたちが全道から集合し勉強会を開催しております。また静岡県にも女将の会がございまして、6年前に姉妹会を提携いたしまして、交流を重ねております。静岡県はやはり北海道より観光の歴史が深く私共も学ぶところが数多くございます。女将同士での交流会は私どもには実践から学ぶ重要な会となっております。また北海道観光振興機構の誘客キャンペーンなどに積極的に参加をして道内道外と活動を行っております。

布村：

函館がごめ連合の代表をしております布村と申します。宜しく願いいたします。函館がごめ連合という組織なのですが、がごめ商品を製造販売している会社が40社集まりましてアンテナショップを運営しながら販売促進活動をしているということです。かごめを函館の新たなブランドとして地域ブランド化を図っていこうということで様々な活動しております。がごめ昆布はだいぶ名前を知っていただけるようになったと思うのですが、平成15年から都市エリア産学連携促進事業で北大の水産学部さんが中心になって水産物の高付加価値化のための研究をしようということで産学官連携で研究が始まりました。そこで取り上げられたのががごめ昆布で、それまでは函館名産の昆布の陰に隠れて、逆に雑草扱いされたのですが、北大の安井先生が健康と美容に有効な成分が非常に含まれているので未利用資源のがごめ昆布を世の中に出そうじゃないかということでいろいろな研究をされました。そして美容と健康に関するいろいろな研究成果が出まして、それを積極的にPRしてもらった結果、新たな健康食材として、また新たなさまざまな美容の商品が生まれてきております。マスコミさんにも注目され、取り上げていただいたのですが、そういったことはなかなか長続きしない、がごめ昆布の良さを正確に伝えようということで、我々が集まって活動を始めました。平成24年から平均価格が昆布とがごめ昆布が逆転するようになってきておまして、商品価値が生まれてきたということになります。その活動を発展させまして昨年から国土交通省さんのご支援をいただきながら地域づくり活動支援体制整備事業の補助をいただきまして、我々の活動を道南食と観光クラスター型6次産業化推進協議会というものを作りまして、新たに食と観光、体験型観光を結びつけながら道南の食材をアピールして、来ていただいた観光客の方に楽しんでいただこうという取り組みもやっております。勝手な造語なのですがクラスター型6次産業化と呼んで、漁業関係者から加工業者、流通業者、飲食店の方々等の幅広い方々が集まって活動しておりますので、それぞれの良さ、ノウハ

ウ、人脈を生かしながら、タッグを組んでみんなで盛り上げましょうということなのでクラスター型 6 次産業化と呼んでおるのですが、観光まで結びつけて、体験型観光まで今トライしております。

星川：

NPO いぶりたすけ愛の星川です。今年の 4 月で 21 年目の活動に入りました。パンフレットをご覧ください。

「あなたのたすけは私のたすけ」という理念に沿って市民互助の活動にこだわって続けてまいりました。当初は介護保険制度ありませんでしたので在宅の方が大変困っている状態でした。たまたま私が社会福祉協議会のボランティア活動をしたことで自分たちののできることを何かしなければならぬのではないかと、社会に無関心でいた自分を反省し、主婦仲間にも声をかけましてこの会を作りました。双方向性の会員なので、お願いされたことをできる会員がいれば何でもできるし、どんな簡単なことでも誰もできなければできないという会です。

在宅サービスでは掃除とか料理作り等のお手伝いをしております。在宅サービスを続けていく中で、家の中で閉じこもっている方がたくさんいらっしゃるということに気が付きまして、集まれるところがあったらいいなということを考えておりました。少し広い事務所を借りることができた 2001 年から、会員同士でお互いに交流を持ってもらうサロンを始めました。みんながやりたいこと、教えたいてことで平日の毎日、カラオケ、麻雀、囲碁、パソコン、歌声喫茶等、みんなで計画して集まっています。サロンに来る方が一人暮らしの方が多かったのでお昼ご飯をみんなで食べるようにしました。みんなで食べると美味しいと好評でした。

その食事を届けてほしいという方がいて、翌年から配食の事業も開始しております。主婦のアイデアで、お弁当箱ではなく簾のかごで食卓をそのまま届けるという配食をしております。料理が得意な主婦が入れ替わり立ち代わりで料理を作ってくれております。

活動を続けていく中で、地域で安心して最後まで暮らしたいということを目指してサービスを増やしてきましたが、なかなか最後まで暮らせないという現実がありました。足が弱って段差で転んでしまうと、泣く泣く遠方に住む家族のもとに引き取られていくという方が多くいらっしゃいました。地域で最後まで暮らすためにはみんなで助け合って暮らせるところが必要なのではないかということを考えていたところに、JKA 補助事業でグループリビングの建築資金を助成してくれることを知り応募しました。幸いにも第一回の補助金をいただくことができ、9 人が住むグループリビング「たすけ愛の家」を作ることができました。

2011 年から始まったのが、社会起業家集団「ともかな」です。今までの事業は自分たちが中心となってやってきましたが、社会起業家を目指す人を応援したいと思って作りました。一人ではできないけれどもみんなで助け合えば夢が叶うのではないかと、共に夢を叶え

るようという意味の「ともかな」と名付けました。発表した時には妄想だと言われました。確かにまだ妄想の段階を出てはいないのですけれども、子育てサロンや、カフェ、ものづくりを助け合いながら頑張っているところです。

2000年の介護保険制度開始よりも前から在宅サービスを始めておりましたので、私たちが努力してきたことが介護保険制度に結びついたのではないかと勝手に自負しております。2000年に制度が始まった時から訪問介護とケアマネージャーの居宅介護支援を始めております。また、国土交通省さんと関係のある、福祉有償運送にも取り組んでおります。

以上が「いぶりたすけ愛」の活動です。高齢者が高齢者を支えるという時代に向けて作ってきましたので、これからが本番です。更に頑張らなければいけないと思っているところです。

② 日頃の活動を踏まえてご意見

小林：

皆様ありがとうございます。短い時間で申し訳なかったのですが、多彩な活動をされていることがわかりました。ご出席の皆様にご日頃の活動で感じていること、問題点や、こういうふうに解決してきたということを踏まえて、新しい計画あるいは行政に対して言いたいことがありましたら是非お願いしたいと思います。

星川：

問題といえば、担い手不足が一番の心配です。当会はPR、情報発信が下手だと思います。お金をかけないで何とかしようとしているからだと思いますが、18年前に助成金をいただいて全戸配布して募集をしたときには担い手も来てくれたのですが、その後は本当に人づてです。団塊の世代に期待しているのですが、なかなか入ってきてくれないのが現状です。高齢者も65歳くらいまでは仕事をしていく時代になるだろうと思いますので、皆さんが一つは社会貢献をしないとイケないという気持ちを持っていただけたら嬉しいと思います。

今回の介護保険制度の改正で市民ボランティア活動による参加が期待されるころだと思います。これから行政と地域とみんなで考えていかなければならない問題だと思います。今できる解決方法としては登別NPOネットという登別のNPO9団体が集まるネットワークがあるのですが、1団体ではなくて、9団体で協力して担い手の募集をしたいと考えています。市民ボランティアにも福祉、環境、健康などの様々な活動があることを知って頂き、活動と呼び掛けていくことが今、出来る事なのかなと思っています。

布村：

先ほどクラスター型 6 次産業化ということを勝手に言わせていただいたんですけれども、その課題を感じておりますのが、アンテナショップを拠点といたしまして業者や消費者も集まって、いろいろ情報が得られるという、非常にいいことなんですが、ショップ自身の自立は難しいとひしひしと感じております。商品価値が上がってきたという話をいたしましたが、そうすると扱う業者が大変増えてきてまして、当初我々が始めたころはがごめ昆布を扱っている業者さんというのはほとんどなかったんですが、今はどこでも扱っているという、ましてや全国でも扱うところが増えてきてまして、そういった中で自立が難しいということがあります。先ほども言った、国土交通省様の支援事業の充実とかをしていただくとありがたいです。地域全体を盛り上げるという活動ですので、誰がお金を負担するのかという話にいつもなってしまうと、なかなか厳しいところでありまして、公的な支援、お金だけではなくイベントの支援もいただきたいなということを率直に感じております。あとは業者とお付き合いをする機会も多くて、業者の悩みもいろいろ感じているのですが、高齢化、特に漁業者の方の高齢化が非常に進んでおりまして平均年齢 65 歳以上なのではないかと、そういった中でどうやって担い手を作るかということを感じています。それは漁業を儲かる産業にしていけないと難しいんだろうと、若い方が魅力的な職場と感じるにはどうすればいいのかなと、そのために研究開発、産学官の研究で付加価値を高めようとしています。そういったこともさらに進めていけないといけないだろうなということで、今私ども、マリンバイオクラスターという産学官の研究事業が 3 月で終わり、北大の先生方と、なにをどう研究してそれを商品に結び付けていけるのかという企画に我々も入らせていただきながら、こういう研究をしてほしい、こういうのがいいんじゃないかということをいろいろやっております。1 起業者で特に田舎になると研究開発をする余裕もありませんので産学官の連携に金融機関も入りましていろいろな研究開発をしていかなければ、なかなか付加価値化、差別化は難しいなと考えております。

水産資源の安定化で考えますと海水温が高温化していると北大の先生も言うておりまして、函館特産のイカも激減しているということです。そういった中で海藻が非常に重要な役割をしてまして、それを増やしたり活用していこうということを我々はやっていこうと思っております。磯焼け問題が道南の方では言われておりまして、そういったことの対策を早期にきちんとしていけないといけないのかなと思います。そのためには海中環境のモニタリングのシステムの開発も産学連携で行ってますし、それを実用化して対応できないのかなと思います。あとは魚種が取れるものが違ってきているということです。それは北海道全体でそうです。従来型の流通するものをその地域の特産ということになっているので、取れてもその技術部門に持っていけないという悩みも聞きます。魚種の変化、環境の変化に対して、急激に変わるものではなく変化することによって、そこを対応できるような流通システムを構築していく必要もあるのだろうと聞いております。イカが取れないと言いましたが、北の方では取れるので、函館でイカが取れると流通しやすいのですが、北の方ですと流通がうまく整っていないのか、ブリとか大型魚も北上していると聞きます

けれども、それに対応したトラックの輸送ができないとか、いろいろなことを聞いていますのでそういったことも必要なのかなと思っております。

あとは観光への取り組みということで、来年新幹線が函館まで開業するということが非常に地元、特に観光業者は期待しております。ただ観光メニューが少ないということを旅行代理店さんに強く言われておりまして、それなら我々は食を中心とした体験観光をやってみようじゃないか、作ってみようじゃないかということで、一次産業者の方々も加工業者の方々も非常に協力的でやってくれております。特に松前方面、桧山方面の方が非常に期待をしておりまして、ただやりたいんだけど二次交通に時間がかかってなかなかこっちまで来てくれないんじゃないかなとかいう声もお聞きしますし、二次交通の利便性をもうちょっと高めていただきたいというようなこともお聞きします。良く言われていますが、新幹線と貨物が並走するのでスピードが出せず東京から 4 時間を切れないという話もありますので、そこを代替えの方法もあるということも聞いておりますので、そういったことの対応もしていただいて、より旅行者の方々が函館に来たいという気持ちを起こさせるようなこともやっていただけないかなと感じております。

須賀：

北海道は非常に四季がはっきりしており、この四季を如何に道外のお客様、訪日外国人の方に味わっていただけるか、自然を生かして如何に楽しんでいただけるか、こういう自然を宝をもって集客活動をしております。当旅館を例に挙げますと、日本庭園がございますので、四季の移り変わりを、庭園を通して楽しめる工夫をしております。また訪日外国人の方は特に旅館に興味を持ってお越しにいただいている感じがします。日本文化を凝縮しているのが旅館なのかなと自負しておりますが、物凄い特別な事ではなく私どもの着物、畳、布団、こういったちょっとしたものに日本の文化を感じて頂いているかと思っております。こちらの会館のロビーに 5 月人形を飾っておりますが、旅館も日本の伝統文化などお披露目し楽しんでいただいております。今年も自然災害に見舞われました。豪雪で千歳空港がマヒ状態になっていました。お客様が足止めされてお見えにならない。その時には事前に私たちも欠航になる、ならないといった情報をネットで確認しますが、お客様が来られないということが結構多かったと思います。また、私たちがよく言っております「冬こそ JR」ですが、今年は結構欠便になっていたのはご存じかと思います。さらに天候でその足を奪われるようなことが数多くありました。インフラの設備というか、もっと基本的な安全、安心の上ででき、天候に左右されない定時の運行ということを切にお願いしたいところでございます。それからお客様の声で、プライベートジェットで千歳を利用する方が、なかなか発着に自由度がないとお聞きしました。富裕層の誘客につとめているならば、こういうこともこれから重要になってくるのではないかと思います。最後に一つ、冬期に道外や訪日外国人の方がレンタカーで来られておりますが、我々地元の者さえ雪道は恐ろしいと思いながらも走行しますが、南国から来られる方は雪道に不慣れです。ましてや道に不慣れでしかも走行が左右逆

の国も多く、殊更危険を伴いますので、何らかのしるし、例えば若葉マークのようなステッカーなどを車に付けて走行すると、地元の人にしても道内の人にしても不慣れなドライバーと認知し思いやりある安全な走行ができるのではないかなと思います。最近訪日外国人の方が公共の交通機関をよく利用されております。大きなスーツケースを持っていっぱいます。団体でいっぱいやる時はバスでお見えになりますので、それなりのキャパシティのあるバスを運用して問題はないのですが、近年は外国のお客さまも個人旅行にシフトしており、その大きなスーツケースの収納スペースがバス、電車内では狭く荷物を置くスペースがなく苦慮しているのが現状でございます。

同じような事が駅にも言えて、地元の登別駅は結構古く駅の古さは歴史を感じてうれしいのですが、海外のお客様に加え、シルバー層の方の旅行がかなり増えております。利用者からは登別駅は階段しかなく、これだけ知名度が高いのに列車で来たら、荷物を持って階段を登って降りしとても大変。これは観光立国とは言えないですよと度々お叱りを受けます。やはり観光を目指すのは利用者の立場になっていろいろとやっていただきたいと思います。新幹線を延ばすのに莫大なお金がかかっているとは思いますが、地方再生にはきめ細やかなインフラ整備をお願いしたいと思っております。要望ばかりでたいへん申し訳ございませんがよろしくお願いいたします。

近藤：

製造業の課題としては2つありまして、1つはエネルギーでして、安心、安全、安定的なエネルギーが製造業には不可欠でして、短期的には電気でしょうけれどもその先には水素ですとか、いろいろなことをご検討いただきたいということが一つであります。我々でできることは地球環境、CO2 ということで節電、省エネ、如何に少ない設備でものを作るか、如何にロスを少なくするか、そういうことを毎日一生懸命しているところです。2つ目の課題は労働力確保でして、高齢化、生産年齢人口が減少という中でどう労働力を確保していくかということで、北海道の中では製造業の認知度が低くて人集めにも苦労しているところなんですけれども。先日にも新入社員が入りまして、親類に製造業の人がどのくらいいるか聞いたところ、ほとんどいないんですね。僕は地方なんですけど向こうに行くと親父も製造業ですし、毎日油のにおいを嗅いでいるわけです。そういうなじみが製造業になかなかないので人集めには苦労しているところです。そんな中でどうするかというと、僕は還暦を超えているんですけども、還暦を超えてもしっかり働くとか、年金受給も遅くなっているので60歳以降もしっかり働く。もうひとつは女性の方もしっかり働けるような機会を作っていくということです。もうひとつは従業員は確実に高齢化していくんですね。うちは平均年齢37歳くらいなんですけれども、これが毎年1歳弱ずつ高齢化していくという中で、健康維持が大きな課題になっております。昨年から会社方針にも健康を取り入れまして、社内にランニングマシーンを揃えたり、バドミントンのイベントをやったり、健康に関する意識啓蒙をしております。うちの従業員は結構喫煙率が高く、全国の工場と比較しますと肥満度も少し

高いしということで全体として健康意識を高めようとしているところです。女性の比率も
うちはまだ低くて数%しかないので、そのためには工程、作業自体、作業設備自体を、女性
の方が働きやすいように高さを下げるとか力の補助装置を付けるとかしないといけないの
で、そういうことをしながら労働力確保、60 歳以上の人や女性も働ける仕事場を作ってい
ければなと思っております。もうひとつ、ここだけで労働力を集めるのは難しいです。札幌
から通えるともう少し働きやすいようになるのかなと思いますけれども、距離もあるんで
すけれども、今では通勤する手立てもないしということで、労働力の流動性がもう少し高ま
ると人が動いていろんなところで仕事ができる、高齢になっても女性の方でも仕事ができ
るようになるのではないかなと思います。

浦田：

煎餅屋の福太郎です。先ほど 3 つ言いました。地域の活性化、観光工場見学廃校事業。2
番目に地域の雇用。3 番目に地元の産品を使う。この 3 つに関してお願いがあります。まず
観光は網走から知床にかけて自然を見たりしていきませんが、その中でうちでは唯一のお菓子
工場ということで、他にはないし、特に冬は雪が降っても大丈夫ということで、必ず安全パ
イとして入れてもらっています。そこで一番困るのが何かというと、通訳なんです。ビデオ
を見せて中国語、韓国語、台湾語、英語とかそういった対応もしますし、プライスカードも
それなりにしますけど、四角四面の通訳ではせっかく観光に来てもらっても印象に残らな
いし、来てよかったと思わない。私の住んでいる福岡では日本語を学んである中国の方や韓
国の方が結構おられるんですね。小清水町は田舎でそういった人を募集しても全くおられ
ないのでどうしたものかなと困っております。第二に、地元の人を雇う、小清水町 5200 人、
網走が 4 万人ちょっと、斜里もたいしておられない、そんな中で 40 人程度雇っております
が、はっきり言って人手不足に陥っております。女性の活用とか言われていますが、私なり
に考えて、わがままパートと勝手に付けさせてもらって北海道新聞にも載せてもらいまし
た。いつ来てもいい、いつ帰ってもいい、このターゲットというのが幼稚園、保育園の若い
お母さんで、パワーはあるけれども子どもがすぐ病気をするのでいつ帰ってもいいという
安心感があります。フルで働かないといけないと「あの人、私たちに仕事を押し付けてすぐ
帰っちゃう」というのがあり、なかなか帰れない。堂々と帰れるシステムを作ることによっ
て活用をしています。わがままパートで 7、8 人来てもらってますけれども、あと 4 人くら
い待機してもらっているくらい、「私も登録しておいて」というくらい人気があるんですね。
こういったことを、まずはパートからですけれども、社員に生かせないか、若いお母さんた
ちにもノウハウというか、蓄積をしていかないとうまくいかないと思いますけれども、こ
ういったことを考えてしています。しかしこれにも限界があります。私は外から来て北海道の
人を見るんですけれども、あまりにも農産物、畜産物、海産物に恵まれすぎています。いい
ものが取れてものすごくおいしいです。取ってそのまま売ればそこそこのお金になります。
福岡ではそういうことは機能しないというか、付加価値というか、アイデアをつけないとい

けない。明太子もそうです。北海道ならそのまま売れるのに、味の素をかけてコショウをかけたら高く売れるようになり特産物となる。こういった方法に持っていけないと、北海道の人が暮らしていけない。人口はどんどん減っているので外部からも呼んできてほしい。魅力がないと東京やあっちの方からは来ませんよね。私はこっちに来て 2 年ですけども、北海道は軽井沢に匹敵するんじゃないかなと思います。お金持ちは涼しい所を求めて、高級な別荘にいきますけれども、一般庶民は北海道はいかがですかとアピールする。私も老後はここに住みたいなというくらいさわやかな気候です。こういったことをアピールすることによって若いうちから取り込んでいただけるような方法はないかなと、夢ですけども考えております。第三に地元の産品を使う。これもいろいろ使っています。でんぷん、イカ、ホタテ、タマネギ、ピート、しゃけとかいろいろ使っています。我が社なら使えますけれども、うちと似たような企業はいっぱいあるんじゃないかなと思います。よそからもうちと似たような企業をどこかから誘致できないだろうか。北海道に来てわかったのが、189 の市町村がある。1 企業が 1 つのところに来ただけでもたくさん企業誘致できるわけですから。うちが来てわかったのが、地元の産品を使ったり、地元の人を雇用したり、私の会社を例に見せてよそからの誘致をぜひお願いしたいと考えております。また、前の方がおっしゃっていましたが、うちが一番困っているのが輸送問題です。東京、福岡に品物を送っているのに、テレビを見たら、新幹線が走るということと、新幹線が走ると貨物が減るということが頭にこびりついて、どうなるかと思っています。今は月平均 15 本コンテナを出しているんですけども、秋口になったらコンテナの奪い合いというか、農産物が多いので秋には足りなくなります。その時にコンテナじゃなくて陸送でもいいからと探すけども、それもないとなるとせっかく作っても運ぶ手段がないと売れないので、そのあたりがどうにかならないかなと思っています。

井田：

私はどこかの団体を代表しているというわけではなくて、小さな会社を経営しております。2 つの視点からお話をさせていただきたいのですが、一つは体験型観光の新規創業という視点、もう一つは女性と高齢者の活躍です。弊社が一番課題としておりますのが、どの観光業も同じかと思うのですが、冬の仕事がなかなか難しいということです。これについては何か打開策があるわけでもなく、今のところは夏にしっかり稼いで冬準備ということしかなく、もう少し物販とかいろんな力をつけていけないといけないかなと思っています。また、新幹線の開通で沸いているのかなと思うのですが、道東の立場だと、道央で止まってしまうんじゃないかという懸念が業界にあるかなと思います。地域としても努力していけないといけないところかと思いますが、一歩先に来ていただくためには、地域を挙げて取り組んでいけないといけないと考えております。新規創業という点では、先ほど弊社の集客の表を見ていただいたのですが、3 年でようやく 1000 名に到達したということで、開業当初から道外のお客様を見込んでおりまして、初年度は十勝の方に知っていただく、次の年は道内の方

に知っていただく、3年後にようやく全国に届くように頑張ろうということで進めてきました。対前年比 8 倍の伸びなのですが、これは計画通りというところで、やはり 3 年かかるというところが非常に苦しかったです。この間に帯広市がフードバレー十勝ということで地域をあげて農業の発信に力を入れているということもあって、弊社の取り組みを非常に応援してくれています。財政的なことで、単年度の事業を何とか活用して支援して下さったということで、3 年くらいはかかるということが正直なところなんです。一方で起業家支援という政策がずいぶんたくさん行われていると感じますし、地域おこし協力隊を含め、若者を地域にという活動が非常に活発だなと思うんですけども、これの、誰でも彼でも、何でもかんでもということが気になっています。都市で仕事ができない若者を連れてきても新規開業できるほど甘くはない。体制を整えて受け入れたはいいいけれども、その方を受け入れても起業にはならないでしょうということがほとんどじゃないかなと思ってます。私も開業当初いただいた創業支援金もずいぶんたくさんの方が受給しているんですけども、残っているのは本当に一部だということも聞いております。創業支援は本当にいいことだと思うんですけども、もう少し精査をして、将来性のあるものに投資する。広く浅くではなくて、可能性のあるところに 3 年間とかしっかり補助なり、ずっと支援するということは必要ないのですが、創業当初は厳しい所がありますので、そういった形でご支援いただけないのかなと思っています。弊社の農村景観という、価値のなかったものに価値をつけてということで活動をしているんですが、まだまだこういった魅力が北海道には埋もれているんじゃないかなと思っていますので、こういったことを活用する能力ある人材を支援するというような形で、もっと北海道の観光プログラムの開発を進めていけるんじゃないのかなというふうに思っています。ご説明いただいた資料の中で、世界水準の価値創造空間を形成していこうとありますが、それでは北海道に住む私たちが世界水準の価値を感じられて理解しているのかということに非常に疑問を持っております。例えば弊社のプログラムは農業体験をしてガイドをしてそこで食べていただいて 4000 円という金額になります。やはり北海道の方は地元の畑で取れたものに 4000 円を払おうという価値を見出すのは難しいという状況にあります。そこで本州の方に向けて発信する。食に関しても同じで、本当にいいものは正当な対価を払ってくれる都市に輸出してしまおうということになっております。昨年イタリアに行ったのですが、本当においしいレストランは田舎にあり、そこに世界中からお客さんが来る。地元の人もそこを認めて通っている。そういう土壤に北海道はなっていないと感じています。先ほど喫煙率が高いということもありましたし、食に対する意識、健康に対する意識も非常に低い。女性の社会進出に対する価値観も都市に比べて非常に遅れていると感じています。こういった教育をしていくことが世界水準の価値を作っていくのに非常に重要だというふうに思っています。社会的な活動というよりは北海道の価値を高めていくために早急に取り組まないといけない。英語教育も同じだと思っています。世界に打って出ると言いながら、うちの子供が通う小学校の近くに安価で英語教育をしてくれるところがあったのですが、全然参加者がいなくてびっくりするんですね。まだまだ英語が必

要だという価値観が保護者にも少ないということで、これからの国際社会に向けて非常に重要だと思いますので、教育を高めていくことが、北海道がこれから目指すものかなと思っています。女性と高齢者の活躍に関しましては、先ほど浦田さんから出た、わがままパート、私もぜひ参加したいと思ったのですけれども、なぜ私がこの仕事を始めたかと言いますと、子育てをしながら自分もやりがいを持った仕事がなかったからなんですね。マタハラもすごく受けました。女性から強いバッシングを受けたりしました。やはり女性や高齢者が働きやすいテレワークだとか、フレックスタイムだとか、様々な手法があると思いますのでそういった新しい働き方が社会の中で認知されていく土壌を作っていくことが非常に大事だなと思っています。最後なんですけれども、保育のことは関係ないかもしれないですが、国としては待機児童の対策としていろいろな対策を打ち出しているところだと思いますが、北海道も札幌を中心にあると思いますが、帯広は待機児童ゼロなんですね。農村部は待機児童問題は深刻ではないと思うのですが、首都圏を主眼に置いた待機児童に対する施策が行われています。それにすべて合わせるがために質の低下が起きています。何が起きているかというと、上の子と下の子を違う保育園に入れれないといけないということが今年から起こっているんですね。制度の改変によるものです。これは待機児童がいる状態ではしょうがないかもしれない。でもそんなにいない。地方では地方なりの政策が必要なのではないかなと思っています。どうしても制度を決めていくのが首都圏を中心となっている中で、そこに目を向けられつつあるのですけれども、先ほど言ったように、教育や子育ては地方だからやりやすいんだよということが実際にあるんじゃないかなと思ってますので、そんなところを打ち出していけるともっと優秀な女性たちの活動ができると思っております。弊社におきましては小さな会社ですので非常に優秀な方々が集まってくださいまして、全く人材問題を感じていないのが現状なのですけれども、これはどうしてかと考えると、女性の働き方に関して理解があり、何かいいことをしているなということで共感していただいて、給料は低いんですけれども一緒に働きたいということで履歴書がどんどん届くというような状況であります。

石井：

今日の「世界水準の価値創造空間」というテーマに合わせて、人口減少高齢化という部分と、この「世界水準の価値創造空間」のビジョンは素晴らしいと思います。これらに対して2つの視点から意見を述べさせていただきたいと思います。私自身の考えとしましては今後の社会が想像されるときに、一人あたりのGDPを如何に増やすかという部分と、自分の生まれもった環境とかでなかなか難しい部分もあると思いますが、働いて生きていける、多様な働き方ですとか、そういう社会を形成することが大切だと思っております。それを実現するにあたって5つ施策をご提案させていただきたいと思います。井田さんと同じ意見ですが、世界水準ということが何かを知っていないと語れないと思ってまして、私も広島県の田舎出身ですが、子供が小さなときから国際教育とか起業家教育的なこと、外国人と触れる機

会とか起業家の方に子供のころからおつかいに行かされるとか、そういう体験があったので自分が住んでいる地域以外にもたくさんの世界があるんだということを知る機会になりました。子供のころからこのように価値観を作り上げていかないと、世界を目指そうとか向上心がそもそも身につかないんじゃないかと思っています。2つめは人材育成にも入っていますが、技術教育というのが非常に重要だと思っています。人口が少なくなっていくことにあたり、時間労働をしないといけない産業もあると思いますが、日本が生き残っていくためには知的労働に切り替えていく必要があると思います。そのために知識を得るとか技術を身に着けるということが非常に重要だと思っておりますので、こうした教育をしていくことが大事です。女性の力の活用にあたって、最近だとテレワークという働き方もありますが、それが可能なのも自宅で作業が可能なくらいのコミュニケーション能力ですとかスキルがあるからこそです。そういった部分での技術教育が必要だと思っております。3つめは、これは規制にも関わることで納税もあり法律論もあるのであくまで私見ですが、外国人労働者を明確に受け入れて雇用をしていくことをしていかなないと、地域の労働力が非常に厳しいと思っております。北海道だと日本全国からの移住者などで成り立っているのです、これを特区とするかは別にして、外国人をとにかく受け入れて働いてもらうということは、先ほどの国際教育、小さいころから外国人と触れ合うということもあり、外国人を受け入れ雇用していくことはすごく大切だと思っております。3つめに外国人の方にお金を落としてもらうことです。須賀さんもおっしゃっていましたが、私も食の海外輸出とかでかなり行くのですが、北海道に対する期待感はあるって、テレビでも爆買いという言葉がありますとおり、ほんとにお金を持っている方は日本人のお金持ちよりもはるかに持ってまして、お金をとにかく使ってくれる。そういう方に使っていただくためには国際教育や英語教育も一緒ですが、単に言語だけ知ればいいということではなく、マインドやスタイルが身につけていないと気おくれしたりします。最近だともてなしの心というものもありますので、そういった部分、サービスを身に着けることも大事だと思っています。最近ではスマートフォンのアプリで外国人も使ってもらえるようなものをIT企業が作ってまして、観光業者の方とかに使ってもらえるサービスも札幌界限だとすごく普及しています。あと、これも波紋を投げかけるかもしれませんが、北海道にとってはのどかな農村風景も大事なことである一方で、世界のVIPを呼べるようなアイランドリゾートの開発が必要だと思っております。先ほどもプライベートジェットの話がありましたが、地方空港にこそプライベートジェットが停まれるようにすることが大事だと思っています。海外に行ったときにその国の偉い方に話をすると、北海道ってプライベートジェットは停まれるんですかと聞かれて、確認したらあまり許可されていないところがあり、すごくもったいない、機会をロスしているなというところがあります。地方空港にプライベートジェットが停まれるようにするのは重要なのではないかなと思っています。もう一つは地方にこそ必要だと思っております。旅行代理店に頼らず、直接海外に営業をかけることが大切だと思っております。利益率だと宿泊だと旅行代理店が入ってしまうと数十%が手数料になり、落ちるお金が非常に少なく

なってしまいます。組合等で直接海外に行って営業をかけるということができる時代になっているので、同じ時間を使っても単価が上がり、地方が潤うと思っております。4番目にエネルギー、電力以外の新しいエネルギー、特に伊達、胆振、苫小牧はそうしたコジェネレーションが可能だと思いますので、こうした環境を整備していくことが大事なのと、エネルギーのかからない社会形成、省エネに本気で取り組んでいくことが大切なのかなと思っています。5つめはお金を集める手段です。地方で何かをするとなると借入とか、創業補助金、寄付、クラウドファンディングとかいろいろありますが、多様なお金を借り入れる仕組みを作っていくということと、それに伴って借りたお金は返していくということと、モラルの育成もそうですが、そうした部分ですね。また再チャレンジすることができるという文化、起業して失敗したら二度とチャレンジできないというのではなく、もう一回チャレンジができるような仕組みを作っていくということが大切なのかなと思います。

5. 意見交換

小林：

ありがとうございました。皆様の多様な意見で、中には共通の意見もありましたが、まだ言い足りていない方がいらっしゃいましたら、お願いいたします。

星川：

世界水準という言葉が出てきてこれは言いたかったということがあるんですけども、アイヌ文化の振興ということが資料の中にも書いてありましたが、登別にはNPO法人知里森舎がアイヌ神謡集を作った知里幸恵さんの銀のしずく記念館を作っています。当会に見学に来た方には、高齢な方がそばを作っている「ゆめみ〜るの地域食堂」と「銀のしずく記念館」は必ずご案内します。道外の方が多いですけども、来てよかったと喜んでいただけます。アイヌ神謡集には池澤夏樹さんをはじめ、多くの文学者の方が絶賛してますし、ロシア語や英語、フランス語にも訳されています。山口県では金子みすゞさんの記念館が大変好評だと聞いています。金子みすゞさんと知里幸恵さんは並び称される存在なのではないかと思うのですが、私たちNPOというのは資金がないこともあり、PRが不足しているんですね。知里森舎さんもそうなのではないかなと思います。もっと行政が応援していただければ大変うれしいと思っております。

また、福祉有償運送でも困っているところがあるので、お伝えしておこうと思います。サロンをしていますということを先ほどもお伝えしましたが、元気な方から要介護の方までいろんな世代の方が集まっています。ただ、元気な方でも自力で公共機関を使ってくるということは大変難しいです。要介護や障がい者手帳を持っている方は福祉有償運送を利用することができるのですが、それ以外の方は利用することができません。当会は当初から送迎

をしていましたが、福祉有償運送法が出来てからは、会としてはできないので違う形でやっています。北海道はかなり広域ですし、交通の便も悪いです。高齢者にとって交通の問題は大きな問題です。介護保険の改正による新地域支援事業にも関わってきます。国土交通省さんと厚生労働省さんと連携を取っていただいて北海道ならではのものを作ってもいいのではないかなと思っています。

布村

地域づくり活動支援体制整備事業という国土交通省さんの事業で昨年度ご支援いただいたのですが、その中で中間支援体制としては函館地域産業振興財団というところがいろいろな窓口をしてくださいまして、我々も助かったのですが、そちらからの声で、やはりあそこに対して非常に人手がかかると。直接的な支援はできないということで、その事務費や人件費がないと継続してやっていけないなというご意見はいただいております。今は1年限りということで、我々も長い形で続けていきたいのですが軌道に乗るまで2、3年くらいはかかるのではないかなと思っているのですが、今の制度が1年間で事務費や人件費がでないのではなかなか厳しいかなと感じております。今年はいいい取り組みができて、いろいろ可能性も出てきてまして、さらに続けていきたいという話も出てきてましてやりたいんですが、資金をどうするか体制をどうするか、そういったところがちょうど議論になっていたところでしたので、要望ですけれども、お願いいたします。

小林：

国土交通省の国土政策局の事業で、事業主体に直接補助せず、事業主体を支援する団体に対する支援ということで、中間支援団体に対する措置が函館の方はうまく連携が取れてできていたかと思います。確か単年度の事業でした。

布村：

中間支援体制の事務仕事が非常に多く発生する、それが事務費のようなものがないと財団さんとかも運営資金が足りないということもあって、そういったことをご要望したいということをお伝えしたいところであります。

小林：

他にどうでしょうか。

井田：

私は教育のことについて言ったのですが、追加してお伝えしたいのですが、北海道の食としては農業のことを知ってもらおうというのがすごく大きな部分になるなと思っています。それが北海道に対する愛着を生んでいくということにもつながっていくのかなと思います。

どうしても食育となると栄養バランスとかに重きを置かれているのかなと思うんですけれども、北海道においては地域に対して愛着を持つということにも重点を置いてもっと取り組んでいくといいかなと思っております。同時にキャリア教育も注目されていますけれども、仕事に対する意識もすごく重要かなと思っています。人材という部分で言い忘れたかなと思ったのが、障がい者の活用ということで、私も専門ではないので勉強を始めたところなのですが、特殊学級が校内に整備されてきて、そちらで学ぶ子供が増えてきたり、座ってられない子供が増えてきたり、気になるくらいの割合になってきているかなと思っています。どうしてもできる人たちを伸ばす施策に重点が置かれているのかなと感じていまして、定時制高校もどんどん減っていて、なかなか適応できない子たちが取り残されているような感じがしています。そもそも若年層が減っている中で、せっかく働ける人たちがそういった形で社会に出られないというのは非常にもったいないと思っておりまして、私もインターネットの簡易テストのようなものでは発達障がいと出ます。起業家は発達障がいが多いみたいなんです。私も診断こそ受けないですけども、そういう傾向がありながら、なかなかじめずに起業したんですね。エジソンなど天才はほとんどこういう障がいがあったと聞いています。日本は障がいがあるとどうしても守ってしまう、隠してしまうので、なかなかそういう方たちの活用を考えられない。個性でそこを伸ばそうという風習にないんですけども、そういった方々をどんどん伸ばして活性化していけるのではないのかなと思っています。製造業や食品加工や単純な作業を得意としている方々もいるので、そういった方々が一般企業の中で人材として力になって働けるという事例も実際にありますのでそういった方に活用を進めていけると、今まで税金をもらっていた方々が、税金を納めるようになるというのはものすごくいいことではないかなと思ってますので、こういったことを活用できればいいのかなということを追加させていただきたいと思います。

須賀：

今、障がい者の方のお話がありましたが、実際に滝乃家は 2 名の方に働いてもらっております。最初本人たちはかなりの努力をしておりましたが、今ではプロ顔負けするぐらい、素晴らしいベッドメイキングをしております。そういった方の活躍の場は旅館にはたくさんありますのでどうぞよろしく願いいたします。

小林：

国土交通省からもう少しここを聞かせてほしいということはあるですか。

桜田参事官：

人口減少ということで、一人一人のレベルをそれぞれが上げていく、または周りの環境をそろえてレベルを上げて対応しないといけないという問題意識はあるのですが、よく言われているのは、製造業の関係で言いますと、「本州の人はグラム単位で考えるのに、北海道

の人はキログラム単位なんだよね、トンとかのこともあるんだよね」ということを昭和の時代にはよく言われるのですが、最近でもそういう傾向はあるのでしょうか。

近藤：

全くそういうことはないと思います。

桜田参事官：

世界水準の価値創造空間という言葉に対して、改定しようとしている計画は次の10年間なんですが、10年だけ考えても私たちを取り巻く環境が長期的な課題でもあるということ踏まえまして、もっと先の2050年を見据えながら次の10年を考えようという趣旨で、「堅苦しい言葉でいかにも役人が作ったものでなじまない」ということで大臣から「世界の北海道」と、確かにそちらの方が聞きやすい言葉ではあるのですが、世界水準の価値創造空間にはまず教育からだとか、世界のどういうところを目指すべきのか具体的に示さないといけないとか、一つ一つそういう方向で持っていけばいいなと感じたわけですが、これについてさらにご意見がございましたら伺いたいのですがいかがでしょうか。

石井：

初等教育において、実は私も最近取組を始めたばかりなのですが、外国の大臣ですとか、その国の血筋でつながっているというのが結構あって、そういうところの子供たちを如何に北海道に留学などで引っ張ってこれるかということがすごく大事です。その狙いは分かりやすく言うと北海道ファンにしまして、国に帰って将来国を担うようになったときに、また北海道に行こうというので、まさに10年20年先を見据えてというのは、そういった取り組みも大切なのかなと考えております。私たちは今、小樽商科大学さんと一緒に、例えばベトナムのホーチミン国家大学と交換留学を少しずつ始めております。その中で外国は本当にこうして違うんだとか、日本は批判社会になっているんですけども、外国だと他人に文句を言っている時間があるんだったら自分の身になるようなことをしたほうがいいよねというのは特に若い人、ASEANなんて特に若者の層が圧倒的に多くて、アメリカンドリームではないですけどもエネルギーな若者が多くて、そういったところにいた大学生は将来的なネットワークはもちろんのことですが、自分が甘かったと実感する部分もあります。日本から向こうに送るというのは意識を変えるというのでいいと思いますし、向こうの国のリーダー候補を受け入れるというのも素晴らしいことなのかなと思ひまして提唱させていただきます。

小林：

須賀様の方ですと、登別に外国人の方がいらっしゃって、外国人のことはこういうところを価値があるとみているとか、意外な発見があったですとか、そういうご経験はありますか。

須賀：

先ほども申し上げましたが北海道は四季がはっきりしているということでリピーターにはつながりやすく、この魅力は宝です。冬お越しいただいたお客様から空から白いものが降ってきて、口を空けていれば入ってきて口の中で溶ける。この感触、感覚が生まれて初めてだと。我々は意外と気づかない事ですけども、雪は大きなごちそうである事を知りました。今まで北海道は冬場になりますと閑散とし、経営者は越冬資金を銀行からお借りして、どうにか冬場をしのいで来ました。しかし今、どの様な状況かと言いますと、主に東南アジアからの旅行者は真白い雪に感動、魅了され大勢訪れております。登別温泉は12月から1月2月と夏位の賑わいがあります。

その方たちが季節を変えたりしリピーターになって来て下さっております。旅館で提供しています浴衣は最初ナイトウェアと間違えられるかなと思いましたが、浴衣は外にも着て歩けるという、着物感覚で浴衣を着てくださり、とても嬉しいことです。先ほども言いましたが着物を着るということ、畳の上をスリッパも何もはかないで歩くなど体験し日本文化に興味をもって日本のファンになってもらえることを期待しております。特に当館は玄関でお履き物を脱いでいただくのですが、外国人にとってこれはカルチャーショックだそうです。ホテルは靴のままお部屋まで行けますけど当館は必ず靴を脱ぎます。これが全く異文化なんですね。非日常性というか異文化に触れるということで日本の旅館の特異性は世界に誇れると思っております。

小林：

今までそういうことから離れて、日本旅館は改装すると洋風にするところが多いですが、全然別なんですね。

須賀：

いろいろな層の方がいらっしゃいますので、自分の文化をそのまま日本に持ってきて同じような設備のところで過ごしたいという方もいらっしゃると思います。東京に行きますと、外国資本の有名ホテルができておりますけれども、それは自分の国の文化をそのまま異国に行っても味わうことを求めている外国の観光客が勿論おられるからですが、一方日本に来たら日本の文化を味わいたい。しかし、居心地の良さは欠かせないとの要望があります。例えば、ずっと膝を曲げて畳に座ることは苦痛になってきますので、その辺の程よい加減を日本の旅館にも取り入れながら、日本文化を楽しんでいただく。そういった旅館づくりは必須にならざるを得ないのかなと痛感しております。

井田：

思い出しましたので手短に。景観の整備と wi-fi の整備を早急にやったほうがいいかなと

思います。海外旅行をしますとやはり wi-fi が非常に重要になりますので、北海道ですと駅でもない状況ですし、パスワードを入れないといけないとかなのでフリースポットを作っていくということが非常に重要なことなのではないかなと思います。

6. 閉会

小林：

ありがとうございました。いろいろとまだ言い足りない方も多いと思いますけれども、そろそろ時間になってまいりましたので、この辺で締めさせていただきたいと思います。最後に北海道局長からお願いいたします。

澤田局長：

もう少し時間が長ければ、まだまだご意見いただけたと思いますが、今日は短い時間の中で私自身も興奮しておりますが、大変広範多岐に渡る、示唆に富む非常にいいお話をお聞かせいただきありがとうございました。これからまだまだ作成の審議が続いてまいりますけれども、事務局としてはいろいろなアイデアを活用させていただいて、議論を活性化させていただけるのではないかと、非常に心強く思っております。その中で時間も限られていますので個々のご意見にというわけにはいかないのですが、いくつか申し上げたいと思います。一つは、今日は人ということがメインテーマでお話を伺ったのですが、冒頭に事務局からご説明差し上げましたように、当然、人口減少というのは避けられない中で、ただ人口が減るから地域が活性化しないという見方には、我々は与する気はありませんで、そういう環境下においてどうやったら地域が今以上に元気になっていくのだろうかと考えております。極めて単純な話は、いろんな意味での人、数でも質でもいろいろな捉え方があると思います、一人一人が活性化して活動量、運動量が増えるということが基本になるのだろうと思います。そういう中で北海道は全国より 10 年ほど早くそういう状況下におかれかかっていますが、途中で何人かの方にご意見をいただきましたが、首都圏の施策、日本を一本の施策でまとめるというのは今までは効率のいい行政運営に結びついておりましたけれども、今やそうではないだろうという問題意識を非常に強く持っておりまして、人の部分だけではありませんけれども、北海道スタンダードをしっかりと打ち出していきたいなと思っております。北海道は歴史的にも地理的にも気象や自然条件下でも日本の中ではかなり特異な土地だと思っておりますので、十分説明ができるのではないかなと思っております。その中でいろんな行政の施行を考えるとハードルは低くはないと思いますが、チャレンジしていかないといけないだろうなと思っております。また、冒頭の説明が舌足らずだったのですが、近藤さんと石井さんからお話があり、北海道の観光と食、あともう一つエネルギーというのに非常に重点を置いておりまして、特に九州は今、北海道のライバルになっておりますが、水素な

んかも、北海道のアドバンテージってなんだろうと考えたときに、裏から見のしかないですね。北海道の自然再生エネルギーを水素できちっとストックして勝負していくということになりますので、エネルギーの整理というのは重点を置いてやっていきたいと考えております。また冒頭に申しました、今まで交流人口としていましたが、最近をあえて対流という言葉を使っています。なぜ対流かという、根っこにあるのが、金太郎飴になってはいけないということなんですね。対流というのは熱の対流みたいな感じで温度差があつて対流になるので、地域が金太郎飴になっていると対流は生まれないんですね。同じようなご意見をいただいたので非常に心強かったのですが、なるべくそれぞれの個性が光るような地域づくり、それが例えばホテル旅館業で言えば、須賀さんがおっしゃったように、みんな同じような作りをするのではなくて、時間と歴史を重ねたところを作って、そういったところにも個性が出てくると思うのですが、そういったことを基本にしながら活性化させていきたい、色濃くしていきたいなと思っています。先ほど事務局の方から申しましたけれども、大臣とお話をしても「世界水準というのがわかりにくいからもう少しわかりやすくしろ」と言われまして宿題をいただいています。ただ 2050 年という、今から 35 年後をターゲットにしたときに、先ほどあったイタリアの田舎に食事や自然を楽しみに世界中からくるというお話がありましたが、一つのイメージはそういうことなんですね。北海道を世界に認知、認識してもらって、わざわざ足代をかけてでも現地に行きたいんだという、それは観光でもあり、他の面もありますけれども、そういったことで北海道のブランドは今と比較的強いと言われておりますが、これはもっともっと磨いていかないといけないと思っておりますので、いろんな見せ方もあると思いますし、そういうところに力を入れていきたいなと思っております。今日は将来の計画策定のご意見を中心にいただきましたが、経験に基づいてご意見いただいておりますので、今現在困っているんだというお話もいくつかありました。すぐに取り掛からないといけないものもありますし、調整する相手がたくさんいて、ここでお約束するわけには行けないけれどもすぐに動かないといけないというものもいくつかありました。それは持ち帰りましてしっかり答えを整理したいと思えます。2 日ほど前にオホーツクの旅館をやっておられる方とお話をしたときに、先ほど千歳空港や JR の冬期の問題もありましたけれども、もしかしたら似て非なる話なのかもしれませんが、我々は通行止め等の情報を如何に迅速に、あるいはどなたでもご覧いただけるようにするというところに力を入れていたのですが、その一歩手前の、1 時間後に通行止めにするかもしれないという検討をしている、その情報が欲しい、それによって商売をやっている方はいろいろなリスクを総合的に考えながら手が打てるんだと言われました。「通行止め直前の 1、2 時間がいかに貴重かあなた方わからないでしょう」と言われました。ただインフラを作っていればいいというのではなくて、かゆいところに手が届くというところに目を向けるようにするべきだというお話をいただいて、なるほどなと感じました。今は代表的な事例でお話をいたしましたけれども、そういったところにも気配り、目配りをさせていただきたいなと思っております。今日は非常にありがたいご意見を頂戴して感謝しております。またこういったお話を聞か

せていただく機会があると思いますので引き続きご支援ご協力賜りますよう、お願い申し上げます。お礼のご挨拶にさせていただきたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

以上